

博士学位論文審査要旨

2011年1月15日

論文題目： アメリカにおける福音派の歴史

学位申請者： 青木 保憲（あおき やすのり）

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

副査： 神戸女学院大学 教授 森 孝一

要旨：

本博士論文はアメリカ合衆国における保守的プロテstantである Evangelicals(福音派)についての、我が国における最初で包括的な神学的・歴史学的学術論文である。

学位申請者の本論文執筆の動機と目的は、アメリカにおいて政治的・社会的に大きな影響力をもつ福音派の実像を、神学的、歴史学的方法論によって明らかにし、なぜ、福音派がアメリカにおいて強大な勢力を持っているのかを明らかにするところにある。

序章において、学位申請者はこの問題についてのアメリカと日本における研究史を網羅している。とくに日本においては、宗教右派やブッシュ前大統領との関係で、福音派を政治との関係で扱っている著作は多く存在しているが、そのほとんどが福音派、福音主義者、宗教右派、キリスト教原理主義者などの名称を区別することなく使用しており、学術的に精査されたものではないと批判し、その原因を歴史的・神学的研究の欠如にあることを的確に指摘している。日本における Evangelicals の呼称が不明確である原因是、アメリカにおいて、Evangelicals と Fundamentalists という用語が意味するところが、時代によって異なってきたところにあるのであり、そのためにも、精密な歴史的・神学的研究が不可欠であることを指摘する。序章第二節「本論文における用語解説」は単なる用語解説ではなく、本論文の研究成果の「まとめ」としての性格を有しており、Evangelicals 研究者だけでなく、一般読者にとっても、極めて有用なものである。

第一章「福音主義から根本主義へ」は 19 世紀後半における、アメリカ・プロテstantの分裂と対立を扱っている。その要因となったのは、近代思想の受容の是非を巡ってであった。当時のアメリカ・キリスト教にとって、近代思想とは聖書解釈の方法としての聖書批評学と進化論であった。Modernists(近代主義者)と呼ばれたリベラル派と近代思想の受容を拒絶した根本主義者の神学の特徴を、当時の社会状況との関係の中で、明らかにしている。

第二章「ファンダメンタリズム論争」では、20 世紀初頭における、北部バプテスト教会と北部長老派教会における、根本主義者と近代主義者の対立を扱い、進化論を巡る「スコープス裁判」(1925 年) を境に、根本主義が偏狭で排他的な立場をとるようになり、世論の支持を失っていく過程を描き出している。

第三章「新福音主義の時代」は、1930 年代から 1950 年代の、新たな Evangelicals の運動であった Neo-evangelicals を取り上げる。これはもう一度世論の支持を得ることができるような、開放的で、学術的にも高度な水準をもった Evangelicals を目指す運動であり、フラー神学校、雑誌 *Christianity Today*、ビリー・グラハムに代表される神学運動であった。しかし、フラー神学校の神学的路線を巡る対立から、この運動が分裂していった過程を歴史的に明らかにし

ている。ここに見られるように、Evangelicals の多様性を歴史的・神学的に明らかにしているところに、本論文の特徴の一つを見ることがあるだろう。

第四章「国家的危機の時代における福音派」は 1950 年代から 1970 年代における、福音派と当時の社会問題との関係を扱っている。それは公民権運動、ベトナム戦争、対抗文化(カウンター・カルチャー)であり、学位申請者はリベラル派を代表する雑誌 *Christianity and Crisis* と福音派を代表する雑誌 *Christianity Today* を第一次資料として、両派の行動とその背後にある神学的相違を明らかにしている。

第五章「宗教右派の黎明期」では、今日に宗教右派の黎明期である、いわゆる「テレビ説教者」の政治参加と、それに対する福音派の多様な反応を扱っている。

終章「『福音派』のアイデンティティとアメリカにおける彼らの存在意義」では、時代を超えた Evangelicals の特徴を、聖書の真実性と正統性をアприオリに神から与えられていると信じる「聖書信仰」であるとし、理念によって国家統合を行わなければならないアメリカの国家としての独自性を、「聖書信仰」によって補完することにより、福音派はアメリカにおいて世論の大きな支持を受け続けていると結論している。

終章における分析の不十分さはあるものの、Evangelicals についての我が国における最初の本格的な学術研究としての価値は十分であり、よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2011年1月15日

論文題目： アメリカにおける福音派の歴史

学位申請者： 青木 保憲（あおき やすのり）

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

副査： 神戸女学院大学 教授 森 孝一

要旨：

青木保憲氏は、2007年3月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年4月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2011年1月15日9時30分より、およそ2時間にわたって神学研究科委員会は総合試験を実施し、青木氏から充分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について、広く深い認識を有していることを確認した。研究に必要な語学力は、博士論文執筆のために英語文献を広く涉獵し、ギリシア語原典聖書にも精通し、正確に読みこなしていることにより十分なものと認められる。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題名：アメリカにおける福音派の歴史

氏　　名：青木　保憲

要　旨

アメリカの福音派の歴史に関して、日本にはまとまった神学論文が存在しない。福音派のルーツやその特質を日本人に分かりやすく解説したものも数少ない。本論文は「福音派とはどのような人々で、アメリカにはなぜ福音派が多く存在するのか」ということを追究したものである。

このような研究は、アメリカでは 1960 年代から始まっている。当初は福音派を根本主義と同一に捉え、社会学的な視点から論じられるものばかりであった。やがてアーネスト・サンディーンが、19 世紀末の神学運動として根本主義を捉えることを提唱し、研究の幅は広がる。70 年代には根本主義と福音派を分けて考える論調が高まる。80 年代前半には、福音派の歴史的背景を文化的社会的現象との連関から追究しようとし始める。その中心人物がジョージ・マースデンである。やがて 80 年代後半に入ると、「誰が福音派なのか」という問い合わせが生まれてくる。しかし、これを追究した研究者が各々の観点から福音派をカテゴライズしてしまったため、結果的に多くの名称が乱立することになってしまった。

日本における福音派研究は、さらに遅れを取っている。カーター大統領が自らを「福音派」と称していたことから、日本では福音派研究が 1976 年以降にスタートしている。さらに、レーガン大統領が宗教右派の応援によって当選したため、福音派研究は常に政治との関わりでジャーナリストイックに語られることが多かったと言える。しかし 80 年代半ばから、神学的考察を始める研究者が登場して現在に至っている。

第一章では、19 世紀半ばにおける南北戦争後のアメリカの様子を描き出す。産業の発達による貧富の差の拡大と、新移民の流入による社会構造の変化は、今まで「福音主義」を道徳の柱としてきたアメリカ人に大きな変革を要求するようになった。神学的に見るなら、近代主義の代表として、聖書批評学が 1820 年代から、そして進化論が 1870 年代からアメリカに流入してきた。このことが後のファンダメンタリズム論争を引き起こすこととなる。根本主義を生み出した要因として、次の三つが挙げられる。第一に厳格なカルヴァン主義に基づいたプリンストン神学校が存在していたことである。彼らは、聖書に書かれてあることを誤りなき真理とする教えを浸透させていた。第二に前千年王国説に代表されるディスペンセーションナリズムの流入である。ナイアガラ聖書会議によって、両者は結びつきを深めていく。第三にリバイバリストのドワイト・ムーディによるホーリネス運動の英国からの逆輸入である。ムーディーはナイアガラ聖書会議の面々とも交流していたため、ホーリネス運動に関わっていた人々は、ムーディーを通してディスペンセーションナリズムやプリンストン神学校との交流を始めることになった。彼らは主にノースフィールド会議において、交わりを深めていった。これらのことから、ムーディーは根本主義を生み出した源流と考えられる。

「金ぴか時代」に、主に都市部での貧困を目の当たりにした牧師たちの中から、福音主義の世界観を変革して、現実対応を図ろうとする者たちが現れてきた。彼らは進化論を受け入れ、聖書批評学の成果を積極的に認めていった。リベラリズムの登場である。やがて彼らは、個人の救いという福音主義の伝統から離れていく。そして、社会全体を救済することが使命であるとする社会的福音を推進するようになる。根本主義者とリベラリズムとの対立は、1890年代から本格的に激しさを増していくこととなる。

第二章では、近代主義を受け入れたモダニストたちと根本主義者たちが聖書批評学を巡って対立する姿を描いている。特に北部バプテスト教会と北部長老派教会における対立は激しいものであった。そのような中、1910年に『根本的なもの』と題する根本主義者の論文集が発刊される。これによって「根本主義」という言葉が社会に浸透していくこととなる。第一次世界大戦中、根本主義者たちは、敵国ドイツの言動を聖書批評学と進化論を受け入れた結果の畜行であると非難した。この主張は国民の支持を広く得るようになっていく。しかし、教派内で自らの考えに合わない人々を排斥しようとする行動があまりに過激であったため、やがてプロテスタント保守派の多くは、彼らの言動を疎ましく思うようになる。根本主義の凋落は、1925年のスコープス裁判である。これ以降、根本主義者は人々の支持を失い、偏狭な時代錯誤者であるというレッテルを貼られてしまう。

ここまで考察で明らかになるのは、根本主義が始まから絶対的教義ではなかったということである。相異なる三つの神学的潮流が混在して生み出されたと言える。彼らは近代主義を全く受け入れず、また近代主義に寛容さを示そうとした保守層までも排斥しようとした。やがて彼らは支持者を減らし、既存教派を出て分離主義者とならざるを得なくなっていく。そして神学的妥協を受け入れた者は教派内に存続し、保守的な信仰を独自で育むようになっていく。

第三章では、1930年代から50年代にかけての新福音主義の動向を描いている。1929年に起った大恐慌は、教会にも深刻なダメージを与えた。メインライン諸教会が教勢を鈍らせる一方、根本主義者たちは聖書学院などで訓練された宣教師たちによって海外伝道の分野で目覚ましい発展を遂げる。そして1940年代後半から、根本主義の偏狭さを嫌い、社会問題にも積極的に関与しようとする人々が台頭してきた。

新福音主義者たちは、プロテスタント保守層の学術性を引き上げることを考えた。そのため幅広い学問的知識を身につける新しい神学校を創設することになる。その代表がフラー神学校である。そして福音主義に立脚した論文や記事を掲載する学術雑誌『クリスチャニティ・トゥディ』を発刊することになる。このアイデアは、1950年代以降に多大な影響を与えるリバイバリスト、ビリー・グラハムから出たものであった。フラー神学校に結集した新福音主義者たちは、ビリー・グラハムとの関わりを通して、根本主義という枠を脱していく。そして、社会やメインライン諸教会にも開かれた勢力となっていく。しかしフラー神学校総長の後継者争議に端を発する新福音主義陣営内の紛争は、聖書理解をめぐる論争へと発展していく。結局これが原因で、新福音主義はその求心力を失っていってしまう。

第四章は、1950年代から1970年代にかけての国家的事件を題材に、福音派内に生じてきた三つの流れを紹介する。1950年代後半から高まってきた公民権運動に対し、

福音派全体はあまり熱心でない。それは、個人の救い以上に大切な命題はないという伝統的な福音主義的要素を継承していたためである。社会全体を法律で改善しようとするメインライン諸教会のやり方に反発を感じていたとも言える。しかし国家の方向性は、黒人の権利を保障しようとするものであった。だから、遅ればせながら福音派もこれに追随していった。1960年代に起こってきた事件と言えば、ベトナム戦争である。当初はほとんどの国民が、この戦争を圧政に苦しむベトナム国民にアメリカが自由と解放を与えるための戦いだと捉えていた。しかし当初の目的から外れていく状況に疑いを抱くようになり、そして反対運動が巻き起こってくる。ビリー・グラハムを中心とする新福音主義者たちは、当初の戦争肯定論から離れ、次第に反対論へと向かっていく。彼らは主流福音派と呼ばれる第一の流れである。一方、始めから戦争反対を訴えた福音派の第二の流れが存在した。彼らはジム・ウォリスを中心とした急進的福音派である。彼らは一貫して自らを「寄留者」と呼んだ。第三の流れは、主流派のように個人の回心のみに偏らず、かといってリベラル派のように社会的福音運動にも傾倒しないで、積極的に社会問題に関わっていく一派である。彼らは改革的福音派と呼ばれた。彼らは政治的活動に関与することも厭わないが、その中に存在するのは、あくまでも伝統的な福音主義である。

やがてカウンター・カルチャーへの対応を巡って、メインライン諸教会の落ち込みとは対照的に、福音派は会員数を増加させていく。この変化を生み出したのは、ビル・ブライトのキャンパス・クルセード・フォー・クリリストを代表とする福音派の宣教団体である。カーター大統領が自らを「福音派」と称したことから、ブライトたちは政治分野へ進出を目論むが、1970年代半ばにおいては、時期尚早であった。

第五章では、テレビを通じて幅広く福音宣教を展開する人々を紹介する。そのラジオから始まったこの流れは、1950年代半ばにビリー・グラハムがテレビ放送を開始したこと、一気に拡大する。そしてオーラル・ロバーツやジミー・スワガートらが台頭してくる。そのようなテレビ説教者の中から、政治的ニューライトの誘いによって、政治分野に本格的に乗り出す者が登場する。それがジェリー・ファルウェルとパット・ロバートソンである。彼らは後に宗教右派と呼ばれるようになる。モラル・マジョリティを創設したファルウェルは、「根本主義」に積極的意味合いを持たせ、自分たちこそ福音派の仲間であるとアピールした。福音派を政治的に目覚めさせ、結束させようと考えたのである。当初この動きに反対していた福音派たちも、やがて1980年の大統領選挙でファルウェルらの活躍が報じられるようになると、しぶしぶではあるが宗教右派に協力するようになっていく。

以上の考察からわかるることは、福音主義に立脚する彼らは、聖書が提供する世界観を絶対のものとして信じているということである。それは理論や神学、理性に裏打ちされたものではなく、むしろ聖書「信仰」と呼ぶにふさわしい。つまりアприオリに「聖書は正しい」という世界観に立って物事を見る姿勢である。アメリカには共通の過去がない。そのため目的意識を持った社会形成をしなければならない。この考え方には聖書信仰が貢献し、人々をまとめる統合作用の働きを担うため、アメリカには多くの福音派が存在するようになったと言うことができる。